

音楽理論研究会通信 第3号

Web Site: <http://sound.jp/mts/>

2005年5月1日発行 1. May. 2005

目次 contents

研究会報告 第5回 10月例会 レポート 第6回 5月例会 ご案内	支部活動 第3回大分例会 報告 音理研広場（新設） 事務局より
---	--

■◇音楽理論研究会第5回例会（10月）レポート

2004年10月3日（日）午後1時50分午後5時30分 国立音楽大学A1（アイ）スタジオ

講演1 中村佐和子（元国立音楽大学教授） 「ソナタ形式の授業風景」

「ソナチネ7番I楽章」（クレメンティ）op.36, No.2 / 「Bクラスのソナチネ」（中村佐和子）
多くの音楽大学の学生はソナタ形式に関心を持っている。が、同時に雲の上にある事の様にもとらえてしまい、結局のところ学ぶ意欲がわいてこないのである。この現状を打開し、学生との距離を縮めるために、教師はどのようにアプローチをかけていけばよいのだろうか。中村先生は至る所で教便をとるにあたり、この問題には常に向き合ってきた。今回の講演は、国立音大4年の楽式論の講座であるという設定で、先生自身が多くの学生に教え伝えてきた方法で行われた。

講演始めに楽式論の講座ではソナタ形式から取り上げ、他の諸形式につなげていく指導法がどれほど効果的であるかを力説した。

講演では「ソナチネ7番I楽章」（クレメンティ）op.36, No.2をテキストとして取り上げられた。楽曲の各部分について、曲頭から順を追って、ジェスチャーやユーモアたっぷりで子供の豊かな感性をくすぐる表現を交えて解説した。その後、全体の流れを先生独自の振り付けでおどりながら解説した。受講者全員でおどり、体で曲の流れを感じられるようにつとめた。さらに、ホワイトボードを用いて曲全体の流れを色彩的にオシロスコープの様な図に描き表し、視覚でも曲の流れが理解出来るようにつとめた。

「Bクラスのソナチネ」（中村佐和子）ではソナタ形式を用いた楽曲の作曲方法に重点をおいた解説が行われた。解説後、この作品も全体の流れを独自の振りによるおどりを交えた解説で総括した。最後に受講者全員でおどり、講演を締めくくった。

今回の講演には、音楽を学ぶお子さんや、指導者の方も多数お見えになり、中村先生の厚い人望が伺えた。

レポーター 角口 琴映

講演2 楠瀬 敏則（元群馬大学教授 尚美学園大学芸術情報学部講師） 「音楽の基礎教育の課題」

氏の長年にわたる教育の現場経験・研究から、現在の日本における音楽の基礎教育への問題提起と考察が行われた。氏はまず、言語教育と音楽教育の関連性を挙げ、誤った教育によって、言語取得能力と同様、潜在的に生まれ持った音感能力を無作為に摘み取ってしまっはならないと述べた。続いて、小学校のリコーダー指導や町のピアノ教室の指導等により固定ドが主流となり、移動ド唱法が衰退し、相対的に音感を学ぶ機会が失われつつあることを強く指摘。実際に参加者全員で様々な調のカデンツを移動ド唱法で歌い、音のゆれの構造を体感した。氏はここで、固定ド唱法を推進し絶対音感を育むことのみ重点を置く教育では、多様化する音楽、特に五線紙上では記譜出来ない音楽も含めて、幅広い音楽を聴感する耳を育てるのに事欠くことを示唆した。講演の最後には、音程感や音階の構造、移調・転調を理解する手助けとなる指導法のひ

音楽理論研究会第6回例会（5月）ご案内

2005年5月22日午後1時50分開始 詳細は2ページ参照

国立音楽大学A1（アイ）スタジオ（☎042-573-5633）

（国立駅南口、線路沿いに立川方向へ徒歩3分）地図は4ページ参照

とつとして、音名を“A, B, C・・・”（英語によるアルファベット読み）で、階名を“ド、レ、ミ・・・”と位置づける提案がなされた。基礎教育の段階においては、いたずらに知識だけを詰め込むのではなく、音楽を感じた時に自然と生まれるこころのゆれ、からだのゆれを体得しつつ、理論と実践の両面から総合的な学習指導を行うことが肝要であるとの意見に、多くの賛成の声が聞かれた。

レポーター 斉藤 慶子

■◇音楽理論研究会第6回例会(5月)ご案内

2005年5月22日午後1時50分開始

国立音楽大学A1(アイ)スタジオ

(☎042-573-5633)(国立音楽大学付属幼稚園地下)

(国立駅南口、線路沿いに立川方向へ徒歩3分。地図は4ページを参照してください)

内容 修士論文発表2点および講演1題

発表者 小野 直樹 角口 琴映(国立音楽大学大学院2004年度修了)

講演者 増田宏三

発表1 2004年度国立音楽大学大学院作曲専攻(音楽理論) 小野 直樹 「ショスタコーヴィチの音楽語法～交響曲作家として～交響曲第14番について」

[発表の概要]

古典派以降の交響曲の歴史の中でたくさんの交響曲を生み出し、「ポスト・マーラー」として日本では有名であるショスタコーヴィチだが、世界大戦中を生き延びた作曲家としてのその生涯は常に国、共産党との関わりがあった。政府に利用されつづけたイメージのショスタコーヴィチではあるが、反面、その苦境の中から彼自身の音楽語法も獲得された、という結果を見てみると、ある意味、利用し利用された関係でもあった。そのような生涯を送ってきたショスタコーヴィチは晩年、「死」をテーマとした交響曲第14番を創作する事となる。彼が生きてきた中で感じた「死」のイメージとはいかなるものなのであろうか。

当論は、交響曲第14番を分析する事によってショスタコーヴィチがイメージしたであろう「死」について考察し、また同時に作品の中で使用されている彼独自の音楽語法についても検討し、最終的には、ショスタコーヴィチがこの作品を通して我々に何を伝えたのかを論じようとする試みである。

始めに、ショスタコーヴィチ自身が交響曲第14番を語った言葉を基に、彼がイメージした「死」について考えた。例えば、1936年に彼が受けた「プラウダ批判」等のソビエト共産党による音楽界への介入があり、彼は常に「粛正」という死と隣り合わせという状況の中、創作活動を続けざるを得なかった。このような事が彼の「死」に対するイメージや、その芸術観に大きな影響を与えている、という事がわかった。

次に、交響曲第14番以前の作品を取り上げつつ、彼の音楽語法について検証し、それを基にして交響曲第14番の分析を開始した。今回は第1・2楽章について特に細かく考察した。そこから導き出されたものは、彼の一見即興風に見える作風は、彼特有の音楽語法の特徴が様々な箇所にもちりばめられている結果であり、その核をなしているものが「音名象徴」と「引用」である、という事であった。

今回の反省点としては、特に筆者の語学力不足から、ロシア語本来の発音や言い回しが音楽にどのような影響を与えているかの考察が十分に出来なかった事である。今後はこれを踏まえ、さらに深く分析を続け、11楽章全体の関連性、および他作曲家の作品(特にマーラーの交響曲)との対比等も加えつつ研究を進めていきたいと思う。

発表2 2004年度国立音楽大学大学院作曲専攻(音楽理論) 修了生 角口 琴映 「ベラ・バルトークの弦楽四重奏曲における音楽語法―第4番を中心として―」

[発表の概要]

ベラ・バルトーク(1881-1945)は作曲家として、後世に残る傑作を数多く生み出している。と同時に、民族音楽研究者としても、自国を中心とし、その近辺の民族音楽をあるがままの姿で追究するという重大な功績を残している。この2つの方面における活躍が彼の作品の中でどのように結びついているのかを、バルトークの作品の中心核だと見られる6つの弦楽四重奏曲、中でも傑作だといわれる、『弦楽四重奏曲第

4番』に焦点を当てて探ってみた。

第1章ではバルトークの作品全体、そして弦楽四重奏曲の歴史から見て、バルトークの弦楽四重奏曲はどのように位置づけられるかを考察した。彼の作品全体から見て、6つの弦楽四重奏曲は各々作曲された時期の作風を総括していること、また、弦楽四重奏曲の歴史から見ても、バルトークがこの分野の発展に貢献した1人であることも確認できた。

第2章では第4番以外の5つの弦楽四重奏曲について成立の観察と分析を行った。さらに民俗音楽からの影響がどのようにあらわれているのか、弦楽器における特殊奏法の使用がどのように変遷されたかという観点からも考察してみた。民謡をそのままとり入れるだけでなく、民謡の旋律線を模倣したり、民謡の典型的な旋律を発展させたりと、作品への民族音楽へのかかわりは多様である。また、バルトークは作品を作るときに弦楽器の奏法における可能性を広げている。

第3章では第2章で取り上げた民族音楽の影響や特殊奏法の効果にも着目した上で、『弦楽四重奏曲第4番』を分析してみた。この作品の音程・拍数・リズム・調性・旋律線といった作品を構成する要素の多くは、彼が研究してきた民族音楽に根源をたどることができる。弦楽器の奏法においても、pizzicato奏法や、弱音器を用いた奏法における2つの方面における活躍の関連は見えてきたが、民族音楽においてはまだ、一部の書物と録音による記録からしか触れることが出来ていない。民俗音楽との関係を追及していくことが、バルトークという作曲家の作品を研究する上で私にとっての今後の課題だろう。

講演 増田宏三 「グレゴリオ聖歌の音組織について」

[講演の概要]

このことについては、公式の定義が一応説明しつくしているかのようですが、実際の音組織、音運動のすべてを解明しているとはいえず、あいまいな領域がすくなく残されています。それらのあいまいさはどこに起因するのか、どのような視点、思考方法によればそれらは解消され得るのかを探ります。

過去の権威ある学説、定義を参考にしつつも、それらのとらわれることなく、人間の本来的な、自然かつ健康的な音感覚に立脚しつつ、音自体の観察、考察によって、グレゴリオ聖歌の音組織、音運動特性の真実の姿に迫ろうと試みます。ヨーロッパ古典音楽の源流であり、グレゴリオ聖歌と密接な関連をもつ15C.~16C.のポリフォニー音楽の正しい理解のためにも、このことはぜひ必要な事であると思われます。教皇グレゴリウス一世（在位590~604）の名を冠するこの聖歌集が一応の集大成の形を整えるのは、750~850年頃ガリア地方（フランス、スイス、ドイツ）に於いてであり、またその後も12世紀頃までで新しい作曲が付け加えられていますので、時代的にも4世紀、あるいはそれより古い起源をもつ素朴なものから、発達したかなり技巧的なものまで、さまざまな様式のものを含みます。記譜法であるネウマは、音の進み方、音のまとまりを示していますが、音の長短、リズムに関してははっきりとした指示がなく、その解釈についてはいまだに論争が行われています。ここではリズムについては触れません。予備的な学習としてネウマ（四角音符）の読み方をマスターしていただきたいと思います。教会旋法の種類とその特色、アンビトゥス、フィナリス、コンフィナリス、ペルフェクトゥス、インペルフェクトゥス、レグラリス、イレグラリス等、用語とその意味についても理解しておいていただきたいと思います。

■◇支部活動

音楽理論研究会第3回大分例会レポート

日時2004年11月21日（日）午前10時~午後5時30分

会場 大分県立芸術文化短期大学 芸術棟3階講義室A

講義1 三上かーりん「詩から生まれた音楽〈冬の旅〉~シューベルトの歌曲集を辿る」

講義2 島岡 讓 楽曲分析

大分で行われている例会も今回で3回目。今回はシューベルトの歌曲『冬の旅』をテーマにしました。歌詞と音楽の関係は密接であり、歌曲を理解する上ではどちらの分析も欠かせないことです。そこで今回は三上かーりん先生に詩の視点で、島岡讓先生に音楽の視点で講義していただきました。聴講生は学生や大学教員、音楽教室講師など約50名、大分県内は勿論のこと、九州他県からも多く、遠くは山口大学の池上敏さんや東京から見上潤さんもいました。両先生は、初心者にもとても分かりやすく、ある程度理解している人にも興味深い内容を短い時間の中で講義されました。聴講生の皆さんの感想は、「面白かった」「よく理

解できた」「自分のためになった」「各先生の講義をもっと聴きたかった」等でした。そして研究会終了後、短時間でしたが会場で懇親会を開きました。そこでは両先生に直接質問したり、情報交換したりとあっという間の一日でした。詳細なレポートは次号で見上潤さんに書いていただこうと思います。

大分では今度も例会を行う予定です。講師は、引き続き三上かーりん先生と島岡先生御推薦の小河原美子先生です。詳細は、音理研ホームページ (<http://sound.jp/mtsj/>) まで。

文 遠藤信一

■◇音理研広場

(新設…今回より音楽理論に関する情報を掲載するコーナーをつくってみました。情報お待ちしております)

「フーガ分析試論～J.S.バッハ：平均率第1巻 第1番BWV846のフーガを例にミクロ的分析の試み」(小川伊作、大分県立芸術文化短期大学研究紀要第41巻、2003年)が『RILM Abstracts(国際音楽文献目録)』掲載文献に推薦されました。

■◇事務局より

音理研代表の島岡先生より浄財(20万円)のご寄付をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。会として有効な使途を5月例会で提案する予定です。

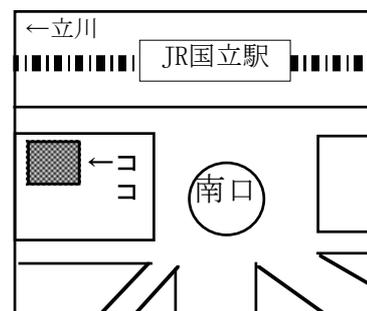
「音理研通信」第3号をお届けします。内容は10月例会の報告と5月例会のご案内です。今回もレポーターをお願いしてみました。関係者の方ご苦勞様でした。発行がまたも少し遅れてしまい5月例会のご案内が不十分にならないか不安です。会場は同じです。今回は若手を育てるという事で修士課程修了生のお二人をお願いしました。また増田先生は西洋音楽の根元ともいべき事柄について講義をしていただける事になりました。多数の方のご来場をお待ちしております。大分例会もよろしく。

音楽理論研究会事務局 ホームページ：<http://sound.jp/mtsj/>

〒870-0833 大分市上野丘東1-11 大分県立芸術文化短期大学音楽科 小川研究室気付

TEL & FAX 097-545-4429 Email:ogawa@oita-pjc.ac.jp

【会場地図】



音楽理論研究会第7回例会(10月)のご案内

2005年10月2日(詳細は次号もしくはホームページで)

国立音楽大学A1(アイ)スタジオ(☎042-573-5633)

(国立駅南口、線路沿いに立川方向へ徒歩3分) 上記地図参照